

WRC/世界ラリー選手権

2022年も TOYOTA GAZOO RACING WRT をオフィシャルパートナーとしてサポート
ロバンペラ選手が史上最年少チャンピオンに！

TOYOTA GAZOO Racing WRT が2年連続で三冠を達成！



12年ぶりの開催となった「ラリー・ジャパン」で勝田貴元選手が3位ポディウムフィニッシュ
サファリラリーに続いて今シーズン2度目の表彰台を獲得



■概要/Outline

国内外のレースシーンで多くのチーム、ドライバーをサポートしてきた PIAA は、ラリー競技においても同様にサポートを続けてきました。1981 年に名門タスカエンジニアリングで横浜ゴム様と ADVAN-PIAA Rally Team を結成して以来、全日本ラリー、APRC(アジアパシフィックラリー選手権)、WRC (世界ラリー選手権) などに参戦しており、1984 年に三菱、1986 年にフォードをバックアップ。その後も日産、トヨタがサファリラリーで PIAA のライティングシステムを採用するほか、1990 年代もスバルや三菱のオフィシャルサプライヤーを務め、伝統のパリ・ダカルラリーで優勝するなど三菱ラリーアートチームとともに最前線を走って来ました。



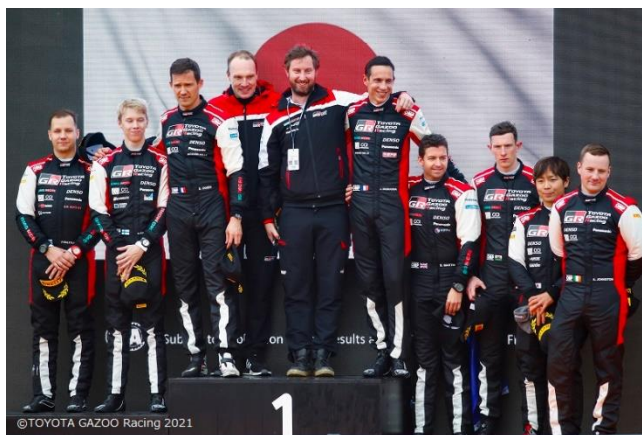
その技術力は 2000 年代に入ってから高く評価していただき、2009 年にフォードヘライティングシステムおよび撥水シリコンワイパーをオフィシャルサプライヤーとして供給するほか、2014 年には同年より WRC に復帰したヒュンデヘライティングシステムが採用された。



さらに 2017 年からは 18 年ぶりに WRC へ復帰したトヨタのワークスチーム「TOYOTA GAZOO Racing World Rally Team」(以下、TGR WRT) ヘライティングシステム、撥水シリコンワイパーがオフィシャルパートナーとして採用。



TGR WRT は復帰参戦 2 年目の 2018 年にマニファクチャーズ部門でタイトルを獲得したほか、2019 年にはオイト・タナック選手、2020 年にはセバスチャン・オジェ選手がドライバーズ部門でチャンピオンを獲得した。さらに 2021 年にはオジェ選手がドライバーズ部門で 8 度目のタイトルを獲得したほか、オジェ選手とコンビを組むジュリアン・イングラシア選手がコ・ドライバー部門、TGR WRT がマニファクチャーズ部門を制し“三冠”を達成した。



その勢いはレギュレーションが一新され、各ワークスチームがハイブリッドシステムを持つ“Rally1”マシンを投入した 2022 年も健在だった。絶対王者のオジェ選手はレギュラー参戦を休止したものの、弱冠 22 歳のカッレ・ロバンペラ選手が GR Yaris Rally1 HYBRID を武器に計 6 勝をマークし、史上最年少でドライバーズ・チャンピオンに輝いたほか、彼とコンビを組むヨンネ・ハルットゥネン選手もコ・ドライバーズ・タイトルを獲得。さらにスポット参戦を行っていたオジェ選手が第 12 戦のラリー・スペインで勝利を獲得し、チームメイトも毎戦上位でフィニッシュしたこともあり、チームとして計 7 勝を獲得した TGR WRT はマニファクチャーズ部門でもタイトルを獲得し、2 年連続で“三冠”を達成した。

これに加えて 2015 年より発足したトヨタの WRC ドライバー育成プログラムの WRC チャレンジプログラムチームである「TOYOTA GAZOO Racing WORLD RALLY TEAM Next Generation」（以下、TGR WRT Next Generation）で GR Yaris Rally1 HYBRID のステアリングを握っていた日本人ドライバーの勝田貴元選手も躍進。開幕戦のラリー・モンテカルロから第 10 戦のアクロポリス・ラリー・ギリシャまで出場ドライバーで唯一 10 戦連続入賞するなど抜群の安定感を披露したほか、第 6 戦のサファリラリー・ケニアでは 3 位入賞を果たし、自身 2 度目の表彰台を獲得した。



このように PIAA がオフィシャルパートナーとしてライティングシステムでサポートする TGR WRT および TGR WRT Next Generation は 2022 年の WRC で毎戦好成績を発揮していたが、トヨタ勢は最終戦として 11 月 10 日～13 日に愛知県および岐阜県を舞台に開催された第 13 戦「ラリー・ジャパン」でも躍進。12 年ぶりに復活した日本ラウンドでも素晴らしいパフォーマンスを見せていた。

■ラリー・ジャパンとは/About Rally Japan

ラリー・ジャパンは文字どおり、WRC の日本ラウンドで、2004 年に北海道帯広市を拠点に初開催。SS は山岳エリアに設定されたグラベルロード（非舗装路）で、以来、アジア地区で唯一の WRC イベントとして定着した。2008 年には北海道札幌市に拠点を移して開催されたが、残念ながら 2010 年の大会を最後に日本での WRC 開催は見送られていた。

そのラリー・ジャパンが 12 年ぶりに復活。しかも、舞台は愛知県・岐阜県で、中部エリアのターマック（舗装路）を舞台にまったく新しいフォーマットで開催。日本特有の中低速コーナーが連続する道幅の狭い林道をメインステージとしながらも、部分的にワイドな高速コーナーや住宅街に面した生活道路を使用するなど様々なシチュエーションが設定された。

SS1「Kuragaike Park」がナイトステージとして設定されたほか、秋を迎えたこともあって、各日のオープニングステージおよびラストステージは薄暗いことから、ラリー・ジャパンでは明るいライティングシステム（補助灯）およびコーナリングランプが必須で、PIAA のライティングシステムもトヨタ勢の躍進を支えるひとつの原動力となっていた。

■レポート/Report

2022 年の WRC もついに最終戦を迎え、11 月 10 日～13 日、愛知県・岐阜県を舞台に第 13 戦「ラリー・ジャパン」が新型コロナウイルス感染防止対策で 2 年間の延期の後に開催。愛知県豊田市の豊田スタジアムをサービス拠点に 12 年ぶりとなる日本ラウンドが開催された。



このラリー・ジャパンに PIAA がオフィシャルパートナーとしてライティングシステムでサポートする TOYOTA GAZOO Racing WRT は 2022 年のチャンピオン、カッレ・ロバンペラ選手に加えて、安定したスピードを誇るエルフィン・エバンス選手、そして、今年のラリー・スペインの覇者、セバスチャン・オジェ選手と 3 台の GR Yaris Rally1 HYBRID で参戦した。

これに加えて TOYOTA GAZOO Racing WRT Next Generation もサファリラリーでポディウムフィニッシュを果たした日本人ドライバーの勝田貴元選手が参戦、超豪華な顔ぶれをラインナップ。

こうして復活を果たしたラリー・ジャパンは 11 月 10 日、豊田スタジアムでのセレモニアルスタートで開幕。数多くのファンの声援を受けた各エントラントはそのまま鞍ヶ池公園へ移動し、同日夕刻、ナイトステージとして設定されている SS1「Kuragaike Park」で競技の幕が明けた。

17 時 30 分を過ぎた SS1「Kuragaike Park」は暗闇に包まれるなか、ランプポッドを装着したマシンが豪快なコーナリングを披露。このオープニングステージで素晴らしいパフォーマンスを披露したのが、TGR WRT のオジェ選手で、PIAA のライティングシステムを採用した GR Yaris Rally1 HYBRID を武器に SS ウインを獲得した。以下、ロバンペラ選手が 5 番手、エバンス選手が 6 番手、勝田選手が 7 番手でフィニッシュ。このトヨタ勢の 4 台は翌 11 日のデイ 2 も好調で、山岳エリアを舞台に本格的なラリーが始まってからも好タイムを連発していた。



11日のデイ2はこの日のオープニングステージとなるSS2「Isegami's Tunnel 1」で、トヨタ勢のライバルチームの1台がマシントラブルに見舞われ、そのマシンがステージ上で炎上するなど波乱含みの展開で幕を明けた。スケジュールの遅延を防ぐべく、続くSS3「Inabu Dam 1」がキャンセルされたほか、SS4「Shitara Town R 1」では、トヨタ勢の別のライバルチームの1台がクラッシュを喫し、同ステージがキャンセルになるなど早々にリタイヤが続出した。さらにコースバリアの修復が間に合わなかったことでリピートステージとなるSS7「Shitara Town R 2」がキャンセルとなるなど予想外のハプニングが続出した。

PIAA がサポートするトヨタ勢としてもSS1 でベストタイムをマークしたオジェ選手がSS2 でパンクを喫し、タイムロス強いられ順位を落としたが、それでも2回のSSウインを獲得したエバンス選手がデイ2をトップフィニッシュ。同じく2回のSSウインを獲得したロバンペラ選手がトップから5.1秒遅れの総合3番手につけたほか、勝田選手が総合5番手につけるなど概ね順調な立ち上がりを見せていた。



翌12日のデイ3もSS8「Nukata Forest 1」で総合3番手につけていたロバンペラ選手がパンクを喫し、トップ争いから脱落するなど手痛いハプニングで幕を明けた。さらに安全上の理由からスケジュールが遅延し、大勢のファンが駆け付けたSS13「Okazaki City SSS 1」がキャンセルされ、岡崎では2本予定されていたSSが1本のみとなるなど予想外のトラブルが続いたが、それでもトヨタ勢は冷静な走りを披露。惜しくも首位を明け渡したものの、エバンス選手がトップと4秒差の総合2番手で競技3日目を終えたほか、SS10「Shinshiro City」で3番手タイムをマークした勝田選手が総合4番手、3回のSSウインを獲得したオジェ選手が総合5番手まで挽回するなどコンスタントな走りを披露した。



そして最終日となる 13 日のデイ 4 ではオープニングとなる SS15「Asahi Kougen 2」で総合 2 番手につけていたエバンス選手がベストタイムをマーク。首位のライバルチームとのギャップを 0.6 秒まで短縮するなど逆転勝利に向けて猛追を見せていた。しかし、続く SS16「Ena City 1」でまたしてもハプニングが発生。総合 2 番手のエバンス選手がパンクに見舞われ、トップ争いから脱落することになったのである。

こうして相次ぐパンクによりホームイベントでの勝利を失った TOYOTA GAZOO Racing WRT だが、それでも TOYOTA GAZOO Racing WRT Next Generation の勝田貴元選手がトヨタ勢の一角として素晴らしい走りを披露。SS17「Ena City 2」より中部エリアは雨に見舞われ、完全なウェットコンディションのなかでラリーが開催されることとなったが、勝田選手はポジションをキープし、トヨタ勢の最上位となる 3 位入賞。ホームイベントでシーズン 2 回目の表彰台を獲得した。



これに続いて SS17「Nenoue Plateau」でベストタイムをマークしたオジェ選手が 4 位、エバンス選手が 5 位に入賞。惜しくも凱旋勝利こそ果たせなかったが、PIAA がサポートするトヨタ勢をはじめすべてのチームは、世界最高峰のラリーカーの走りで、詰めかけた数多くのファンの声援に応えるように素晴らしい走りを披露していた。



そのほか、ラリー・ジャパンでは全日本ラリー選手権などの国内ラリーで活躍するチーム&ドライバーもエントリー、2022 年 全日本ラリー選手権の JN1 クラスでシリーズ 2 位の TOYOTA GAZOO Racing の勝田範彦選手/木村祐介選手組もデイ 3 でロールオーバーを喫しデイリタイヤとなったが、それでもメカニックの懸命な修復作業で規定時間内に修復しデイ 4 で復活を果たし、リエゾン区間でも地元ファンの大きな声援に答え、PIAA の LED ライトバー、撥水ワイパーを装着した GR ヤリスは総合 28 位で完走を果たした。

TEAM BRIDE の豊田市地元の佐々木康行選手・中嶋杏里選手組は PIAA の LED ライトバー、撥水シリコンワイパーなどを採用した GR ヤリスで終始安定した走りで総合 23 位完走したほか、

D-SPORT HALFWAY RALLY TEAM は相原泰祐選手・萩野 司選手組が PIAA の LED ライトバーを装着したオープン 2 シーター軽自動車、WRC に世界初参戦のダイハツ・コペンで総合 30 位完走を果た

したほか、K' S WORLD RALLY TEAM の伊豆野康平選手・東山徹広選手組も LED ライトバー、撥水シリコンワイパーなどを装着したトヨタ・ヴィッツを武器に RC5 クラスで唯一の国産車でクラス1位、総合31位で完走。



TOYOTA GAZOO Racing GR Yaris 勝田範選手・木村祐介選手組



Team BRIDE GR Yaris 佐々木康行選手・中嶋杏里選手組 撥水シリコンワイパーにPIAA ロゴ貼りました



D-SPORT HALFWAY RALLY TEAM ダイハツ コペン 相原泰祐選手・萩野 司選手組



K' S WORLD RALLY TEAM の伊豆野康平選手・東山徹広選手組 TOYOTA Vitz RS

クルーの走行後のコメントでは、今回のアイテナリー（走行スケジュール）でも、早朝や夕刻以外の昼間でも林道に差し掛かると突然暗くなるので、補助ランプを装着して本当に助かったというコメントを頂き、少なからずお役に立てたことを嬉しく思います。

このようにラリー・ジャパンはハプニングが続出するサバイバル戦となったが、PIAA のサポートドライバー＆チームは、PIAA のライティングシステムや撥水ワイパーなどを武器に素晴らしい走りを披露、改めてPIAA 製品を装着することによる、視界確保の重要性を評価頂いたWRCラリー・ジャパンでした。

■PHOTO GALLERY



TGR WRT サービス

豊田スタジアムメインゲート



TOYOTA GAZOO Racing ファンブース内

ゼロカーの2台（GR Yaris、COLLORA GR FOUR）



サービスのピットでSS1に備えるGR Yaris Rally1 勝田貴元選手号 PIAA ランプポッドも装着済



©TGR 2022 Japan

豊田スタジアムでセレモニアルスタート前に整列



©TGR 2022 Japan

セバスチャン・オジェ選手



©TGR 2022 Japan

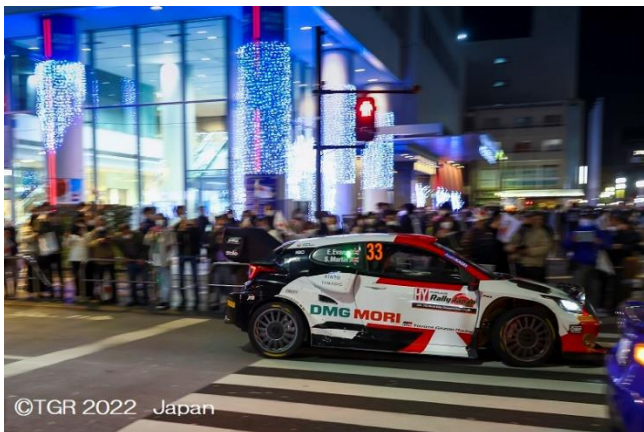
スタート前に全クルーが太鼓で安全祈願



SS1 鞆ヶ池はナイトステージ #18 勝田貴元選手



SS1 鞍ヶ池 セバスチャン・オジェ選手がステージベスト



豊田市駅前のリエゾンを走る GR Yaris Rally1、音をお伝え出来ないのが残念です



岐阜のリエゾンでも多くのファンが間近で GR Yaris Rally1 を応援、日本らしい景色です



SS14 岡崎 前走者のダストが視界を妨げたが迫力も増していた、多くのファンが河川敷を埋め尽くした



デイ4 終盤で痛恨のパンクを喫したエバンス選手組

日本的な景色を象徴する熊野神社前を激走するマシン



4日間全てのSSを走り終えて豊田スタジアムに帰還

TGR WRTのサービス前はいつも大勢のファン



最終SSでオジェ選手の猛追を抑えてからの抱っこ！

PIAAライティングシステムも6年ぶりに凱旋帰国